

## 〈研究レポート〉

## 比蘇寺縁起考

— 仏像の用材の問題を中心に —

北 條 加 奈

## 一、比蘇寺縁起と放光仏

吉野の比蘇寺<sup>(1)</sup>は、吉野寺や現光寺とも称されていた。古い説話によると、光を放つ仏像の寺として有名だったようだ。

現在は世尊寺と名を変えた寺は、聖徳太子の創建であるとされている。

比蘇寺の仏像造立説話は多くの書物に記されているが、本稿では、その中で主なものとして七書を取り上げる。時代順に、『日本書紀』<sup>(2)</sup>、『日本霊異記』<sup>(3)</sup>、『聖徳太子伝暦』<sup>(4)</sup>、『扶桑略記』<sup>(5)</sup>、『今昔物語集』<sup>(6)</sup>、『聖徳太子伝記』<sup>(7)</sup>、『元亨釈書』<sup>(8)</sup>である。

それぞれ主な特徴に絞り、表にまとめた。(66頁参照)

夏五月の戊辰の朔に、河内国の言さく、「泉郡の茅渚<sup>ちぬのうみ</sup>海の中に、梵音有り。震響、雷声の若く、光彩、晃曜<sup>くわうのき</sup>にして日色の如し」とまをす。天皇、心に異しびたまひて、溝<sup>いけ</sup>辺直<sup>のあたひ</sup>を遣して、此に但に直とのみ日ひて、名字を書かず。蓋し是伝写して誤り失へるか。海に入りて求訪<sup>もとと</sup>めしむ。

是の時に、溝辺直、海に入りて、果して樟木<sup>くすのき</sup>の海に浮かびて玲瓏<sup>ていかた</sup>くを見つ。遂に取りて天皇に献る。画工に命せて、仏像二軀を造らしめたまふ。今し吉野寺に、光を放つ樟の像なり。(『日本書紀』卷十九、欽明天皇十四年)

『日本書紀』欽明天皇条のこの伝説は、文献上で初めて確認される仏像の造像説話だと言われている。欽明天皇十四年の夏五月、河内国泉郡の茅渟海で梵音が聞こえた。その音は雷鳴のようであり、日の光のように輝いていた。このことを聞いた天皇が人を遣わして木を手に入れ、仏像を二体造らせた。そして、吉野の寺にある光を放つ像がその像だと締めくくられている。この時発見されたのは「樟木」で、雷鳴のような梵音が聞こえ、日の光のように輝いていたという、霊木伝説である。

『日本霊異記』上巻第五縁は、時代や人物は違うものの『書紀』と場所や話の筋はほぼ一致している。また『今昔物語集』第十一巻第二十三話は、『日本霊異記』に似通っている。共通点は、舞台が敏達天皇の時代であること、発見されたのが楠であったこと、造られた仏像が三体であり阿弥陀像であること、その経緯、そして造られた仏像に纏わる話が付け加えられていることである。『今昔物語集』では、人物名と仏像が光を放ったのが現光寺に安置した時であったという点で今までの書物とは異なり、さらに「窃ニ稲ノ中ニ隠シタレバ、現光寺ヲバ窃寺トハ云フ也ケリトナム語り伝ヘタルトヤ。」という一文が新たに加えられ、「ヒソデラ」と呼ばれる

ようになった起源の出来事であるという特徴が話に付け加えられている。

この比蘇寺縁起に大きな変化がみられたのが、次の『聖徳太子伝暦』である。この書物では、舞台となる時代を、聖徳太子が二十四歳、推古天皇の即位から三年（五九六）としており、『書紀』の欽明十四年（五五四）とも、『霊異記』の敏達天皇の時代（五七〇―五八六）とも大きな時期の違いがある。発見された木は、これも前者と違い、「是為沈水香者也。此木名栴檀香木」とあり、「栴檀」という名の「香木」である。この香木については後に説明するが、発見する際の特徴として「其香異薰」という記述が新たに加えられている。これを聖徳太子が使いを遣わして手に入れ、栴檀であると見抜く。そして推古天皇に進言し、勅命を受けて百済工に仏像を造らせた、としている。造られた仏像は観音菩薩であり、仏像の数については書かれていなかったが、吉野の比蘇寺に安置され、時々光を放ったと記述されている。

『聖徳太子伝暦』説話の特徴を受け継いでいるのが、『扶桑略記』、『聖徳太子伝記』、『元亨釈書』である。

『扶桑略記』は表記の違いは見受けられるが、おおむね『聖徳太子伝暦』と似ている。『伝暦』の影響を強く受けてい

ると推測される。

『聖德太子伝記』と『元亨釈書』も、『聖德太子伝暦』と年代が共通し、話の構成も似通っている。しかし、『聖德太子伝記』で見つかるのは「赤梅檀」という名の木であり、そしてこれは『聖德太子伝暦』や『扶桑略記』とは異なり「浮木」で、「而其色嚴、切取テ焚之、其香遠ク薫ス」であつた。また『聖德太子伝記』においては、聖德太子がこの木が香木であるというだけでなく、「靈木」とであると言及したことを新たに加えている。また、「彼靈像常ニ放光、故ニ名現光寺」という記述があり、「現光寺」という名の起源としている。

『元亨釈書』は『聖德太子伝暦』や『扶桑略記』に酷似しているが、「南海之濱有浮查」から『聖德太子伝記』と同じく香木が浮いていたと明記されている点で異なる。

時代順に見てみると、比蘇寺の造像説話は、まず「推古以前」の時代で、海中でクスノキを発見し、天皇または皇后がそれをういて仏像を造ることを命じ、光を放つ仏像を造り、比蘇寺に安置した」という内容と、「推古天皇の御代、三年に、岸に流れ着いた香木を発見し、聖德太子の進言で光を放つ仏像が造られ、比蘇寺に安置した」という内容の二つに分けら

れる。この系統の違いを今後、前者を第一の系統、後者を第二の系統とする。『今昔物語集』を除いて、平安時代前期を境に変化していることがわかる。『今昔物語集』は平安後期の作品だが前者の特徴が表れているのは、『日本霊異記』から書承されたものであつたためと考えられる。

## 二、放光仏の用材

二つの系統について考察するにあたって、気になる記述が『日本書紀』巻第二十二、推古天皇三年の記事にある。

三年の夏四月に、沈水、淡路島に漂着<sup>よ</sup>れり。其の大きき一囲なり。島人、沈水ということを知らずして、薪に交てて竈に焼く。其の烟気、遠く薫る。則ち異<sup>か</sup>なりとして献る。

この説話では香木で仏像を造つたという記述はないが、時代や香木の特徴、発見のされ方は第二の系統の説話に非常に似ている。これを単なる偶然でないとすると、『聖德太子伝暦』等の説話は『書紀』や『霊異記』の説話の要素と『書紀』巻二十二の記述が合体して出来たものであることが推測される。なぜそのようなことが起こったかについて、仏像の

用材ということに焦点をあてて考察したい。

先ほども述べたが、比蘇寺縁起の内容に明らかに変化がみられたのが『聖徳太子伝暦』である。『伝暦』は聖徳太子の伝説を一つにまとめた書物である。『日本書紀』『上宮記』『上宮聖徳法王帝説』などをはじめとして、聖徳太子の伝記・説話は数多く伝えられた。その中には、この比蘇寺縁起のように以前は聖徳太子の時代の説話でなかったものが、太子の時代に擬せられた例も多々存在する。この説話も太子信仰の影響を受けて変化したとみることができると思う。そう考えると、第二の系統は、聖徳太子の靈験説話として強調され、造像譚よりむしろ太子信仰の喧伝を目的として書かれた説話とすることができる。

比蘇寺縁起で、仏像の用材となった木は大きくクスノキと香木に分けられる。そのどちらも、霊木として語られている。古代では霊木信仰が人々に強く根付いており、霊木にまつわる説話が数多く残されている。その中でも、霊木による造像説話として、『日本霊異記』中巻第二十六縁、長谷寺縁起などが挙げられ、仏像と霊木信仰が強く結びついていたことがわかる。

ではなぜ、比蘇寺縁起では、霊木の中でもクスノキと香木

だったのだろうか。

第一の系統でクスノキが用いられたことについては、該当する時代に実際に造られた木彫仏の素材に基づいていると考えられる。飛鳥時代の木彫仏の素材はクスノキであるとされている。法隆寺夢殿の救世観音菩薩像、中宮寺の菩薩半跏像、法隆寺大宝藏院の百済観音菩薩像、法隆寺金堂の四天王像、法輪寺の虚空蔵菩薩像などの仏像は、全てクスノキで造られている。

その理由は、クスノキは大木になり大材が得られやすく、樹全体に樟脳を含み芳香をもつために耐久性、耐虫害性、保存性がきわめて高いということが挙げられている。さらに比較的軽く、加工しやすいので造りやすい。またクスノキは、『日本書紀』推古二十六年の条、『日本霊異記』上巻第三縁などでしばしばみられるように、船の用材とされてきた。<sup>9)</sup>

このことから、第一系統の説話の中で霊木がクスノキであったのは、古代の根強い霊木信仰に加えて、当時の実態に基づいて書かれたからであったことがわかる。

### 三、仏像と梅檀

第二の系統、『聖徳太子伝暦』以降、仏像の用材は梅檀（赤梅檀）、沈水香となる。梅檀は香木の一種で芳香がある。

和名「びやくだん（白檀）」という「赤梅檀」は梅檀の一種であり、牛頭梅檀の別称である。インド南部一帯の山地とくにマラヤ山（現在の西ガッツ）地方から産出する、梅檀の中で最も芳香があるとされている。沈水、沈香の原木はインドのヒマラヤ東部、アッサム地方原産のジンチョウゲ科の熱帯樹で、その樹脂分の多い材質の部分が強い芳香を発するので、それを乾燥して香として用いる。「沈水」の名は樹脂分の多い材質の部分が重くて水に沈むことに由来し、その他の部分は淡黄白色の材質部分が比較的軽く、一般に「浅香」という。そしてこの梅檀は、正式な仏像の用材として位置づけられている木材である。それは、仏像の起源とされている優填王の造像伝説による。

群臣王に白さく、「當に何の寶を以て如來の形像を作るべきや」と。是の時王、即ち國界の内の諸の奇巧の師匠に勅して、之に告げて曰く、「我今形像を作らんと欲す」と。巧匠對へて曰く、「是の如し、大王」と。是の時優填王即ち牛頭梅檀を以て、如來の形像を作る。高さ五尺なり。

是の時波斯匿王、優填王の如來の形像高さ五尺なるを作りて、供養せしを聞きぬ。是の時波斯匿王、復國中の巧匠を召して、之に告げて曰く、「我今如來の形像を造らんと欲す。汝等時に當つて之を辦ぜよ」と。時に波斯匿王此の念を生ずらく、「當に何のを用ひて、如來の形像を作るべき耶」と。斯須にして復是の念を作さく、「如來の形體は煌くこと天金の如し、今當に金を以て如來の形像を作るべし」と。是の時波斯匿王純ら紫磨金を以て、如來の像を作る。高さ五尺なり。爾の時閻浮里内に始めて此の二の如來の形像有り。

（『増一阿含經』卷二十八、聽法品三十六）

この仏伝によると、起源となった仏像は牛頭梅檀を用いた檀像と、紫磨金の像であることがわかる。

城内の故宮中に大なる精舎の高さ六十餘尺なるもの有り。檀にて刻せる佛像有りて、上に石蓋を懸く。鄔陀衍那王の作りし所也。靈相間起り、神光時として照すことあり。諸國の君主は力を持みて擧げんと欲し、人衆を多

くすると雖も、能く轉移すること莫し。遂に圖して供養し、俱に眞を得たりと言へり。其の迹を語らんに、即ち此の像たる也、初め如来が正覺を成じ已り、天宮に上昇し、母の爲めに法を説かれて、三ヶ月、還りたまはず。

其の王、思慕して形像を圖せんことを願ひ、乃ち尊者没特伽羅子に請ひて、神通力を以て工人を接けて天宮に上り、親しく妙相を觀て梅檀に彫刻せしなり。如来が天宮自り還られるや、刻檀の像は起ちて世尊を迎えたり。世尊は慰して曰く、「教化すること勞せる耶。末世を開導せんことは、寔に此れ冀ふところ爲り」と。

精舎の東、百餘歩に過去四佛の坐及び經行せる遺迹の所有り。其の側、遠からざるところに如来の井及び浴室有り。井は猶ほ汲むに充つれども、室は以だ頽毀せり。

〔『大唐西域記』卷五、憍賞弥國〕

『大唐西域記』には、「刻檀の像は起ちて世尊を迎えたり」ということから、釈迦が天宮から地上に帰ってきた際にこの檀像が起ちあがつて釈迦を迎えたということ、またこのことに対して世尊、すなわち釈迦は「教化すること勞せる耶。末世を開導せんことは、寔に此れ冀ふところ爲り」と述べた、というエピソードが付け加えられている。

これらの書物の記述を根拠として、木彫像における正式な用材は「梅檀」であるべきだと仏教では考えられていた。しかし、先に述べたように梅檀は限られた地域でしか生育しない木であるため、その用材を手に入れることは難しかった。

当時の日本で梅檀がどれほど手に入りにくいものであったかということを示す説話が『靈異記』中巻第六縁にある。

この話では聖武天皇の時代、善行を積もうという近いを立てた人が経巻を収める箱の資材とするために白檀や紫檀を捜すことから始まる。奈良の京にあったのでそれを錢百貫払って買い取るも、大きさが合わなかった。新たに手に入れようにも、その手段がないと嘆く。最後には法事を行い、精進し懺悔した末に箱が延びて入るようになったという靈異が記されているが、ここで注目したいのは白檀や紫檀を捜すために「使を四方に遣はし」、「錢百貫」を出して買い、さらに新たに捜そうとするともう当てがない、という記述である。正倉院の宝物として納められている事実と合わせて、いかに白檀などの香木が貴重なものであり、手に入られなかったかがこの話でわかんと思う。

白檀はインドや東南アジアの原産で、中国でも入手困難だったため、代用材という考えが生まれたという。唐代の玄奘

が著した『十一面神呪心經義疏』に、次のような記述がある。

問若無白檀之國者爲何木作像也。答若依方法者。必求白檀而作像也。若以義門而推者。若求而不得者亦以柏木作像也。何故者。若觀世音必依白檀木像而現瑞應者。

白檀が手に入れないときには「柏（栴）木」で作像せよとある。鈴木喜博氏は「栴木像と檀像彫刻」の中で、「栴木」はカヤに該当すると述べている。<sup>(10)</sup> また、井上一稔氏は、ヒノキ科の樹木と指摘している。<sup>(11)</sup>

八〜九世紀に作られた一木彫像について、ヒノキかカヤかという意見が分かれていたが、岩佐光晴氏らの調査研究によつて、一木彫像の多くがカヤを用いていたということが判明した。<sup>(12)</sup> これは、当時、木彫像をカヤで作るという共通認識が幅広く浸透していたことを示し、その背景に「ビャクダンの代用材としての「栴」、つまりカヤの認識であつたと考えられる」という。そして、その代用材による檀像という考え方による一木彫像の成立の契機が、鑑真の来朝にあつたということを推測されている。鑑真は、艱難を乗り越えて、天平勝宝六年（七五四）に来朝し、唐招提寺を建立した。鑑真は中国でも木彫像の制作を行っており、鑑真の一行には「雕檀・刻鏤」という檀像制作にかかわると思われる工人がいたとい

う（『唐大和上東征伝』）。

鑑真の来朝をきっかけに、「檀像の代用」という考え方が浸透したということは、つまり同時に、本来仏像は白檀で作るべきであるという考え方が、より広まったということになるのではないだろうか。比蘇寺縁起の霊木がクスノキから栴檀に入れ替わったのは、日本における仏像の用材に対する認識の変化に符合しているのである。

#### 四、結び

比蘇寺縁起は、聖徳太子説話として編集されるときに、仏典の普及や鑑真の来朝を受けて生まれた仏像の用材は檀木であるべきという意識を反映して、推古紀三年の伝説を加え、このような説話にしたてあげられていったと考えられる。檀木は実際には手に入れないものであり、その代用品まで定められるほど貴重な木材だった。その木材が流れ着くという奇跡を話題とし、その材質を見抜く聖徳太子の明晰さを演出した説話になったのだろう。

現存する比蘇寺の本尊は奈良時代に造られた銅像であり、今回の説話に出てくる、木材で造られた放光仏というものは



存在しない。奈良時代は木彫像より金銅像が多く造られていた。しかし銅像の説話ではなく、木彫の放光仏説話が多くの書物に取り上げられ、広く知られている。古代における霊木信仰と仏像の信仰の結びつきの強さがうかがわれる。

比蘇寺縁起の放光仏説話は、実際の仏像の用材の変遷に対応している。古い説話では用材が「クスノキ」であった。それが梅檀へ変化したのは、日本では手に入りにくい梅檀への憧れが、第二の系統のような説話として表現されたのである。

## 注

- (1) 奈良県吉野郡大淀町比曾にある曹洞宗の寺、世尊寺の古称、または通称。推古天皇三年（五九三）聖德太子の創建とされる。享保年間（一七一六―一七三六）朴導秀拙が再興し、世尊寺と改称した。旧寺跡は、薬師寺式伽藍配置を示している。
- (2) 小島憲之他校注『新編日本古典文学全集3 日本書紀②』（一九九六年、小学館）による。
- (3) 中田祝夫校注『日本古典文学全集6 日本霊異記』（一九七五年、小学館）による。
- (4) 国文学研究資料館『真福寺善本叢刊、第五卷』（二〇〇六年、臨川書店）による。
- (5) 物集高見『新註皇學叢書、第六卷』（一九二七年、廣文

庫刊行會）による。

- (6) 馬淵和夫校注『新編日本古典文学全集35 今昔物語集①』（一九九九年、小学館）による。
- (7) 藤原猶雪『聖德太子全集 第三卷』（一九四四年、龍吟社）による。三六二―三六六頁。一三二八年頃成立。
- (8) 黒板勝美『日本高僧傳要文抄』（二〇一一年、Nelibrary）による。
- (9) 『播磨国風土記』の「明石の駅家、駒手の御井、速鳥」伝説も当てはまる。樟で作った、鳥が飛ぶように速い「速鳥」という名の船についての話である。
- (10) 鈴木喜博「柏木像と檀像彫刻」、『美術史』第一〇七号、一九七九年）参照。
- (11) 井上一稔「檀像考―平安期彫刻史への序章―」（『文化史学』第三十七号、一九八一年、十一月）参照。
- (12) 金子啓明・岩佐光晴・藤井智之・能城修一・安部久著『成城学園創立100周年記念シンポジウム報告書 仏像の樹種から考える古代一木彫像の謎』（二〇一五年、東京美術）参照。

（ほうじょう・かな 二〇一五年度

成城大学文学部国文学科卒業生）

\* 本稿は、平成二十七年卒業論文（平成二十七年十二月提出）の一部に加筆修正したものである。



表  
1

木の入手経緯	発見された木	場所	時代	
海中から梵音が聞こえたと河内国が天皇に申す。天皇の命で海に入った溝辺直が海に浮かんで輝いていた樟木を献上した。	樟木	泉郡の茅渚海	欽明十四年夏五月の戊辰の朔	日本書紀
大部屋栖野古聞きて奏す。天皇は黙り込んで信じなかった。皇后に奏上すると、皇后は信じた。その命を受けて屋栖野古が行き、「霹靂に当たりし楠」を手に入れた。	霹靂に当たりし楠	← 高脚の浜 和泉国の海中	敏達	日本霊異記
嶋人が沈水と知らずに薪に交えて竈で焼く。太子が使を遣わして献上させた。	梅檀（一、囲長八尺）	← 淡路嶋南岸 土左南海	推古三年卯乙春三月↓四月	聖徳太子伝暦
漂着した物の香が異しく薫ったため朝廷に献上した。	梅檀	← 淡路島南岸 土左南海	推古三年乙卯春↓夏四月	扶桑略記
文部屋栖野が天皇に奏上するも天皇は信じなかった。皇后に申しあげる。皇后の命を受けた栖野が現地に行き、光る楠の大きな木を手に入れる。	大なる楠（現ニ光有り）	河内国和泉郡	敏達	今昔物語集
古い浮木を見つけて、それを焚いた所その香が遠く薫った。それを希代なものと思いい、上洛して太子に奏す。	赤梅檀	← 淡路島 土左南海	太子廿四歳春	聖徳太子伝記
沿海の民が漂着した物を薪の為に取ったところ、其の煙遠く薫ったため朝廷に献上した。	沈水香木	← 南海之濱 淡州南涯	推古三年春↓四月	元亨釈書

書物の成立年	寺	仏像が寺に納められた経緯	造られた仏像	造仏に至る経緯
七二〇年	吉野寺		仏像二軀 (光を放つ樟の像)	天皇が画工に命じて造らせた。
原撰本七八七年 現存本八一〇〜 八二四年	豊浦堂↓竊寺	守屋の騒動で稲藁の中に隠し、その後取り出され勅命により吉野の竊寺に安置。	阿弥陀の像(光を放つ)	大部屋栖野古の連の公が皇后に進言し、皇后の許しを得て、池辺直水田に菩薩三軀を造らせた。
九一七年	吉野比蘇寺		観音菩薩高数尺 (時々放光)	聖徳太子の進言を受けた天皇が勅命を出し、百済工に命じて造らせた。
一〇九四〜 一一〇七年	吉野比蘇寺		観世音	梅檀だと見抜いた太子の進言を受けて天皇が勅命をだし、百済工に造らせた。
一一一〇年前後	豊浦寺↓現光寺	守屋の騒動で稲藁の中に隠した。その後取り出して奉った。	阿弥陀の像(安置の際、光を放つ)	文部屋栖野の連の公が皇后に進言し、皇后の許しを得て、池辺直水田に菩薩三軀を造らせた
一三二八年頃	大和國吉野郡比曾寺		十一面の尊形	太子の進言を受けて天皇が百済國の佛工鳥に造らせた。
一三三二年	吉野比蘇寺		観音像(時々放光)	聖徳太子の進言を受けて天皇が百済工に造らせた。